
BABELL!!

カタツムリフミオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A B E L ! !

【NNコード】

N13481

【作者名】

カタツムリフミオ

【あらすじ】

ファンタジー小説です。
エリーゼという女の子が、世界の危機を救うために、伝説の大魔法使いバベルを呼びに行く、という物語です。

今日も雲行きが怪しい。

ここアパロー・ゼの町にも昨日、まるで季節はずれの雪がちらついた。窓から、荒れる風をエリーゼが見ている。

外ではエリーゼの父が畑の作物を風から守るため、必死に覆いをかけていた。

木のドアが開き、中年の男がかけこんでくる。

「おじさん。どうしたの？ひどい風ね。」

「ああ、全くだ。帽子が飛ばされちまたよ。」

男が赤毛の髪を整えながら応える。

「エリーゼ、長おなが呼んでる。」

「長様が？」

「なんでも、お前に頼みたいことがあるそうだ。」

「なにかしら。行つてくるわね。」

外に出ると、強い風が吹きつける。

遠くの田園におじさんの帽子が飛ばされているのが見えた。

「お父さんー長様の所に行つてくるわー！」

風にかきけられそうに声を飛ばす。

父親が手をあげる。

レンガのゆるやかな坂道を歩く。

アパロー・ゼの町は丘の上にある。

広がる田園の向こうに風車が音をたてて回っている。道の反対側から、長いパンを入れた袋を持ったおばさんがフードを押さえながら歩いてきた。

「エリーゼ！どこ行くんだい！？」

「長様が呼んでるらしいの！」

「やうかい！しかしこの頃の天氣には困るねー。じうしたんだうしね

！」

「本当ね！いろんな所でおかしくなつてるらしいわね！」

「ああ！こんなじや今年の麦はどうなるのかねえ。気をつけて行つ

てきな！」

長の家は一番の高台にある。

庭で犬がしつぽをふつている。

「久しぶりね。」

裏手には山羊に似た長いカーキ色のモのマリコといふ家畜が何頭か草を食んでいた。

「長様。エリーゼです。」

ノックする。

「お入り。」

壁ぎわの伝声管から長の声。

深い赤色のカーペットの通路をそろそろと歩き、応接間のドアを開く。

応接間も同じ深い赤にコーディネートされて、低いテーブルの向こうに長が座つていた。

長は小柄な銀髪のおばあさんだ。
瞳の色は片方ずつ違う。

青と緑の瞳がエリーゼを見る。

「久しぶりだね。」

笑つて、エリーゼに座るよう手で示す。

「お久しぶりです。お元気そうでなによりです。」

エリーゼは腰を下ろす。

「悪いね。わざわざ来てもらつて。」

「いえ。私に何かお話があるとか。」

長の瞳は刻々とゆるやかに色が変わつていく。

緑から黄、青からピンク。

「この頃天気の様子がおかしいだろ？」

「そうですね。今日もすごい風です。」

部屋には窓がない。

壁の棚や天井に多様な不可思議な道具がかけられている。
くらばしの大きいやカラスの剥製(はくせい)の横二、よく見る二本物。

アラビア語はアラビア人で書かれてゐる。アラビア人で書かれてゐる。

長の飼い猫のタレスだ。

エリエが生まれた時から成猫たった二年で死んでしまった。

様子がおかしいのはここだけじゃなし

「變化？」

「それが何なのか、具体的には分からぬが……いいことじやうなー。

「おお、この辺の風習が、おもしろい」と、おじいちゃんが喜んで呟く。

どうも魔力に関係しているようだ。

エリーゼ、お前はなんともないかい?」

「今のところは……別に変わりたことはありません」

長はテーブルの下から紫水晶でできた花を出して前に置く。

「私が思うよりずっと大きな、深刻なものらしい。

「お前に頼みがあるんだよ」

「はい。」

「バベルという魔道士を探して、連れて来てほしいのだよ。」

「バベル？バベルって…………あの伝説の大魔法使いの？」

世界こひるますだ。
そ・・・・も二伝説になつて
行方も知れなしけ
またこの

「でも・・・・探しても来てくれるかしら。バベルってなんでも・・

・・性格が悪かつたらしいじゃありませんか。」

「・・・・・私も一度、私が幼かつた頃に会つたことがあるが、そんな人ではないよ。」

「・・・・でも、どうして私なんですか?」

「占いで出たのだよ。何度占つても、闇の中に光る鍵はバベル。そして、それを呼べるのはエリーゼ。お前だと。」

「私が・・・・。」

「できるね?」

考えるエリーゼ。

「やつてみます。」

エリーゼは決心の顔でうなずく。

長はほほ笑む。

「でも、どこをどこから探せばいいでしょう。」

「そうだね・・・・・・・・占つてみよう。」

水晶の花に長は息を吹きかけ、上に茜色あかねの粉をふりまく。まぶたを閉じて両手を結んで花の上に置く。まぶたの上に瞳の色が映る。

めまぐるしく色とりどりの光が移り変わる。

水晶の花はそれに呼応するように光の泡が現れでは消える。めったに見られない長の魔力の光景を目のあたりにしてエリーゼは興奮していた。

タレスは身じろぎもしない。

徐々に光が落ち着き、もとの薄暗さに戻る。

「イルパヴの街に行きなさい。

そこの港から、・・・・・お前の着いた時、最初に出る船を見送つて、2番目に出来る船に乗りなさい。

そうすれば道が明るくなる。」

記憶に刻みこんでエリーゼはうなずく。

「気をつけて。幸福を祈つてるよ。」

明日の朝、発ちなさい。丘のふもとは風が止んでるから。」

「はー。」

「お父さんとお母さんに心配かけさせてしまないと伝えておいておくれ。」

「ええ。行つてきます。」

その日の夕食。

父と母と兄とエリーゼがテーブルについている。

「長の言つことなら、お前に間違いはないんだが。どうだ、怖いか。」

父がパンをちぎってシチューにかけて言つ。

「少しね。けど、こんなこと初めてで、遠くまで行くのも・・・・。」

「風のせいかしら、なんだかワクワクする。」

「勇ましいね。」

兄がシチューをすすつて言つ。

「確かに魔力に恵まれたエリーゼが適任だよね。」「けど心配だわ。」

母がシチューをすくうスプーンを止めて言つ。

「エリーゼ、くれぐれも危険なことはしないよ。魔獸もこの頃

現れてるらしいから、できれば街にいなさい。」

「街にバベルがいるかな。いたらとっくに見つかってゐる。」

兄が口をはさむ。

「確かにそうだな。」

自家製のビールを飲みながら笑つ父を母がにらむ。

「気をつけてね。誰か一緒に・・・・。」

「大丈夫。ただの人探しよ。長様の言つていた通りに行つてチャツチヤツと帰つてくるわ。イルパヴの街よ。船の旅よ。素敵だわー。」

ウツトリとするエリーゼ。

「イルパヴかー。あそこは酒がつまい。」

「バベルに変なことされないよ。」

母が語氣を上げる。

「バベルつていえば最後の大魔法使いだろ？今も生きてるのかーす
ごいなー。ミイラみたいなじいさんだつたりして。」

兄が笑う。

夕食を終えて早々に自分の部屋に入り旅の準備をする。
窓から景色を眺める。

この景色ともしばらくお別れね。
ノックの音。

応えると兄がドアを開けた。

「これ。」

兄の差し出したものはナイフだった。

柄^えと鞘^{さや}にキラキラと光る石がちりばめられている。

兄が大切にしている宝物だ。

「なに？」

「かしてやる。失くすなよ。」

「いらないよ。」

「んなことないよ。冒険に行くんだろ？」

「じゃあ一応もらつとく。」

「返せよ。何かいい土産買つてくれよ。バベルの魔法の道具と
か。あー欲しいなー。」

兄は一人で盛り上がりドアを閉める。
兄のナイフをカバンに入れれる。

他には少しの食料とライト、服をつめる。

朝、家の前にエリーゼと大勢の見送りがいる。

風は昨日よりはおとなしい。

エリーゼはお気に入りの春色のボレロを着ておめかしをしている。

「じゃあ行つてきます。」

「エリーゼ、これ持つて行きなさい。」

母がドライフラワーでできたお守りを渡す。

「エリーゼちゃん、これ飲んで行きな。」

酒飲みのおじさんご搾りたてのマリュのミルクを渡す。

それを飲み干さないうちにいろいろな物や言葉がエリーゼに渡される。

お腹がいっぱいになつてやつとねぎらつも静まり、手を振つて歩き出す。

子供たちが途中までついてくる。

丘のふもとまで来ると風がなくなつていた。

エリーゼは手の平を開いて前に向ける。

目を閉じて精神を集中する。

水色の光がエリーゼを包み、髪の毛とボレロが揺れる。

一瞬、透明な羽がエリーゼの背中でキラリと輝き、エリーゼの体がフワリと浮く。

そのまま高く高く宙に舞い、丘を見下ろすほどにまで来る。さつき見送つてた人達が歓声を上げて手を振る。

「氣をつけてなー。」

小さく父の声が聞こえる。

手を振つて飛び出す。

気流は乱れているが、魔力で風の影響は軽くできる。

空を飛ぶと、近くが遠くに、遠くが近くに見えて不思議。梢がざわめく。

ちょっとおかしい。

長様の言つていた通り、魔力が少し揺らいでる気がする。なだらかな丘陵が続く。

イルパヴの街は大清湖だいせいこを抜けてもつとずつと先だ。

見たことのない鳥の群れが飛んでいた。

大清湖が見えてきた。

青く澄んだ湖面にさざ波の光が溶けている。

その上を通つていると、急に強い雨が降つてきた。

「キャッ。」

エリーゼは大きくバランスを崩す。

どうしたの！？魔力が出ない！

湖に急降下する。

あんなに穏やかだった湖面は、無数の見えない鳥につつかれている
ように波紋が暴れている。

「キヤーー！」

湖に大きな波しぶきが上がる。

銀色の小魚を見たのを最後にエリーゼの意識はとだえた。

エリーゼの目が覚めると、花模様の天井が見えた。

「気がつきましたね。どこか痛い所はありませんか？」

見ると横に桜色の服を着た看護婦がエリーゼをほほ笑んで見ていた。

「私、どうしたの・・・・？」

「湖に落ちたのよ。それを見た釣り人が助けてくれてここまで運ば
れたの。」

だんだん思い出してきた。

雨に打たれて落ちてしまつたんだ。
きつと気が動転したんだ・・・・。

「ここはどこですか？」

「リモーネよ。」

「リモーネ・・・・。」

リモーネはアパロー・ゼとイルパヴの中間にある大きな街だ。

「今・・・・私どれくらい・・・・？」

「あなた丸一日眠つてたのよ。今はお昼過ぎ。何か食べる？」「えつ！」

丸一日？どうしてそんなに眠つてしまつたのかしら！

「大変だわ。急がないと。私、もう大丈夫みたいで。お世話にな
りました。」

「そう？じゃあ退院の手続きをするわ。少し待つてね。」

看護婦が出ていく。

ベッドから窓の外を見るエリーゼ。

リモーネって始めてだわ・・・・。

街行く人はみんなおしゃれでカッコいい・・・・。

町並みもなんてキレイなの。

カラフルな屋根の家々、見下ろす市場では色鮮やかな果物がパツチワーワークのように並べられていた。

道にはめこまれたタイルがピカツと日光をはねかえす。

エリーゼの髪はグシャグシャだ。

カバンは大丈夫かしら。

ドアが開いて看護婦がカゴを抱えて入ってきた。
中にはエリーゼの服とカバンが入つていて。

「服はお洗濯してもう乾いてますよ。バッグは浮いて中は無事みた
いよ。よかつたわね。」
ああよかつた。

軽い草の糸で編まれてるせいだ。

母にもらつたドライフラワーのお守りも幸い無事だつた。

一日分の入院費を払うと、エリーゼの財布は船賃とあと少しの生活
費だけの頼りない額になつてしまつた。

しかたない、こんな素敵な街だけど簡単な食事だけしてイルパヴに
向かいましょ。

螺旋階段を下りて、街に出るとそこは今まで見たことのない華やか
めぐるめぐ世界。

窓から眺めるよりずっと生き生きとして活氣あふれる街だつた。
人々の髪からは果物の香り。

宝石で有名な街だけあり、そこかしこにきらびやかな宝石店やアク
セサリー、壁や道にも小さな宝石がキラめいている。

市場から賑やかな声がリズムをとつて、大清湖から獲れたばかりの
淡水魚を山盛りにして運ぶ青年が前を駆けて行く。

一日何も食べてないので、エリーゼのお腹はもうペコペコだ。

市場の屋台で荒塩が焦げた魚の串焼きと、果汁したたる名前も知ら
ない大きな甘酸っぱい果実にむしゃぶりついて、手頃な食堂を探し

歩いていると、ヒリーゼはまだどことなく体の調子がおかしいこと
に気付く。

体の中に食べ物じゃなく何かが足りないような感じだ。
どうしたのかしら、風邪？

風つていえば、あの時、本当に急に魔力がぬけてしまったような気
がした。

まさか・・・・。

静かに血の気がひいていく。

まさかね。

心配を打ち消そうと、ヒリーゼは街を少しそぎれて誰もいない裏路
地に入った。

精神を集中して魔力を呼び起す。

水色の薄い光の粒子がフラフラと浮き上がるだけで、いつまで経つ
ても体が浮かない。

本格的に血の気がひいて、冷や汗が額をつたつた。

そんな・・・・どうして・・・・。

それから何度も何度も試したが同じことだった。

夕食時の街のレストランにエリーゼがポツンと一人でテーブルにつ
いていた。

テーブルの上にはフルーツジュース、細長いステーキが何本かジュー
シーな音をたてて、冷製の魚の乗った小皿のパスタが美しく盛り
つけられている。

いつもなら無我夢中で食いついてしまうはずも、今は小さなの

どを通らないようだ。

どうしたらいいのかしら。

空を飛べないのなら、イルパヴの街は遠すぎる。

かといって、アパローゼの町に帰るのも同じくらい遠い。

フルーツジュースを飲むと、酸っぱさに歯をくいしばって、急に心
細くなつた。

どうしてこんなことに・・・。

もう何回も自問した気持ちだつた。

原因は分からなくとも、現実に今、私は魔法が使えないんだ。

それなら、町に帰つて他の人に代わつても時間の無駄じゃない。

せつからここまで来たのだから。

やつてみよう。列車に乗れば・・・・・・

「あ！」

お金が無いんだ。

列車賃を払つたら船賃が足りなくなる。

帰るしかないか・・・・・。

カバンを開く。

お母さんからもらつたお守りを見たくなつたからだ。

カバンの中でお守りの横の兄から借りたナイフがキラキラ光つっていた。

これは確かに遠い所から来た親戚の人が兄にくれたものだつた。

かなり高そうだ・・・・・・。

売つたらいくらになるんだね？・・・・・・。

いけない、そんなこと考えたら。

列車賃くらいにはなるかしら・・・・・・・・・・・・。

エリーゼの足は宝石店に向いていた。

とりあえず下取りしてみよう。

売る気はないわ。

兄の宝物だもの。

色とりどりの星のような粒が光る扉を開ける。

ショウウイングーにはエリーゼの頭ほどもある宝石が飾られていた。店の奥に夢の中のようなたくさんの宝石が並ぶカウンターを挟んで、大柄な主人がモノクルをかけて虹色の石を覗いていた。

「あの、すいません。これ下取りしたらいくらになるでしょうか？」

エリーゼはここに宝石に比べたら控えめに見えるナイフを差し出す。

「どれどれ・・・・・・・・・・・・」

虹色の石をフワフワした台にのせてから、主人はナイフを受けとる。しばらく主人は鞘を抜いたり、ためつすがめつしげしげと確かめてから言った。

「650クレシだね。」

「650！？」

650クレシといったら、列車賃と船賃を合わせても、まだお釣りがくる大金だ。

「そうですか・・・。」

沈んでしまったエリーゼの様子を見て店の主人が聞く。

「どうしたんだい？足りない？」

「いえ・・・。」

エリーゼは事状を簡単に説明した。

大事な用があつて遠くまで行かねばならない道中で、どうしてもお金が足らなくなってしまい、このナイフは兄から借りた大切なものだと。

「そうか・・・。」

親身な主人は首をひねる。

「それなら、これは僕が一時預かって、代わりにお金を君に渡したらどうかな？」

君が戻つてくるのはいつぐらい？

「多分・・・、1月以内には。」

「それじゃあ、多めに見て2月、必ず僕が大切に保管しておくよ。お金は利息なしで返してくれれば、このナイフは君のもとに戻る。どうだい？」

「・・・。お願いします。」

650クレシを握りしめて、高架下にエリーゼは立っていた。
きっと、必ず返すわ。

バベルに会つたら、バベルだつて鬼じやないもの、大魔法使いなんだし、はるばる来た女の子におこづかいくらいくれるかも。
無理矢理、楽観的に考える。

行ってみたい。

自分に任せられたこの不思議な旅をここで終わらせたくない。
無謀かも知れなけれど、がんばってみよう。

上を列車が走る度に、チラホラと色の粒が舞い落ちてくる。
伸びやかな歌が遠くから響く。

「グズグズしてはいられない・・・・。いっぱい眠っちゃったから。

」

駅で切符を買う。

夜行列車だ。

列車に乗るのも初めてで、しかも夜行なんて。

それだけでワクワクが戻ってきた。

ホームで、大きな木製のカバンを持った若い婦人が恋人と別れを惜しんでいるのを見ていると、列車が汽笛を鳴らして停まった。

「イルパヴ行き。イルパヴ行きー。」

トパーズ色の列車。

半月型の窓から緑色の淡い光が溢れて、中は広い個室に分かれていた。

列車の下には川のように色が流れている。

カバンを柔らかいベッドに置いて、窓際の椅子に座つて外の景色を見つめる。

列車が火花を散らし、動き出した。

街の灯りがユラユラと移ろい、何も無い暗闇になった。

黒い窓には決意にひきしまったエリーゼの顔が映る。
月が動かずについてくる。

少し前からずっと満月だ。

ベッドに飛びのり、靴下を脱ぐ。

柔らかいマットからほんのりと花の香りが漂う。

明日はお昼ごろにイルパヴに着いて、それから船乗り場に行つて、

2番目の船をたしかめて・・・・。

どこに行くのかな、それからどうしようか。

ウトウトと考えていると、まぶたは溶けて眠りの底が見える。

丸一日眠つたのに、エリーゼは熟睡した。

小鳥がさわぐ声で、エリーゼは起きあがる。

朝だ。

カーテンを開けると、窓^{ガラス}に黄色い木々が薄い葉を揺らしている。

列車の速度はゆるやかだ。

部屋を出て、食堂に行つてみた。

空いていた。この列車の乗客は少ないようだ。

背もたれの高い椅子に座つて見回すと、昨夜駅で恋人と別れをおしんでいた婦人がコーヒーを飲んでいた。

黒い細身のドレスを着ている。

目が合うと軽くほほえみかけてくれた。

「ご注文はお決まりですか？」

たつぱり白いヒゲをたくわえたボーアイが聞く。

「えーと、モーニングカフェセットお願いします。」

「かしこまりました。」

外は爽やかに晴れていた。

今どの辺なのかな。

「よろしい？」

声をかけられて、向くとさつきの婦人がエリーゼの向かいの席を指さしていた。

「え、ええどうぞ。」

「ありがとう。話し相手が欲しかつたの。お一人でご旅行なの？」

「旅行つていうか、ちょっと用事があつて。」

「へーご用。面白そうね。」

婦人は肘をついてニコニコ笑つている。

恋人と別れていた時はあんなに泣いていたのに・・・・。

今は陽を受けて眩しいほどだ。

「私はパテラ。よろしく。」

「エリーゼです。」

「私はイルパヴで船に乗つて家に帰るんだけど、あなたはイルパヴに『ご用』があるの？」

「いいえ、私も船に乗るんです。『ご用』に行くかは分からんだけど・・・・・・。」

「行き先がわからない船に乗るの？えー、ますます面白そうね。よかつたら教えて欲しいなー。」

パテラのキラキラ輝く瞳に見つめられて、エリーゼは説明せざるをえなくなつた。

人に話したい気持ちも有つたし・・・・・・。

「なるほど。それはすごい事ね。」

エリーゼの話にパテラは驚いていた。

「バベルねー。もはや伝説だもの・・・。この世界に大きな変化が起ころりそつてのも、確かにそつかもしれないわね。めつたに現れない大獸たいじゆうもちょくちょく田撃たうげきされてるつて聞くし、何よりお天氣がおかしいもの。」

パテラは納得したようにうなずいている。

「だから、船に乗つた後どうしようか、・・・・・・・・・・魔力も出なくなつちゃつたし。」

「そうね。今の時代、魔法らしい魔法を使える人も少ないから、信
用できる占い師を探すのも骨が折れることね。」

うーんと2人は首をひねる。

パテラはエリーゼのモーニングカフェセツトから、赤い小さなフル
ーツを無断でつまみ食う。

エリーゼはメープルパンケーキをほおばる。

「とりあえず船が出てるかどうかね。」

パテラがエリーゼのフルーツジュースを上品に飲んで言った。

「イルパヴもお天氣が狂つてゐみたいなのね。だから、もしかした
ら出でないかもしれないわよ。」

「そりだつたらもつと困るわ。

長様は2つめの船に乗つたら道が明るくなるつておっしゃつてたし・

・・・・・・・

「そりよね。」

また2人はうーんとうなり出した。

考えるのをやめて、パテラとカードゲームをしていろひひし、

「イルパヴ。イルパヴー。」

と駅に着いた。

パテラは木製のカバンを重そうにホームに下ろす。

カバンには車輪がついていて、軽やかな音を立てて滑り出す。

「まずは波止場で確認しましょ。」

駅から出ると外は一面雪景色だった。

「わー。」

「何コレ!?」

歩く人は皆慣れない足取りだ。

「イルパヴにこんなに雪が積もるなんて・・・しかもこの時期に・
・・ますますもつて船が心配ね。」

波止場に行くまでに、氷になつた道でパテラは3回、エリー・ゼは2回滑つてしまいをついた。

「船は予定通り出てるよ。海の方は穏やかなもんだから。」

筋骨たくましい男が応対する。

「今から2番町に出る船はどう行きですか?」

「2番町?えーと、・・・・・・・アサノハだね。」

「あら、私と一緒に!」

パテラが声をあげる。

2人は目を見合わせて笑う。

船の時間にはまだあるので、昼食をとりに街に向かつ。リモーネの街とはまた違つて、味のある街だ。潮風が自由な気分にさせる。

雪も塩辛うつな感じだ。

「ヒヒ、ヒヒ。ヒヒの魚料理はすうじいのよ！」

パテラはイルパヴには何回か来ていて、けつこう詳しかった。

店の中では船員達が酒を飲んで笑っていた。

港の見える広い窓のテーブルについて料理を注文する。

店員はやけに大声で応える。

港も雪がかぶさって、荷の上を船員たちが雪かきしていた。

「へい、おまち！」

ドンと置かれた皿の上には、生きたままの大魚がおとなしく横たわっていた。

皮はむかれ、豊かな白身がむき出しにされている。

魚は誇らしげに笑つてるようにも見えた。

「すういでしょ！？」

「生きてる！・・・ビリやつて食べるの・・・。」

「見ててみ。」

パテラが大魚にフォークを近づけると、魚はフォークを凝視する。次の瞬間、体に力を入れて、一口大の身が勢いよく飛び出した。その身はパテラのフォークに突き刺さった。

穴のあいた大魚は息も荒く、思いきり白目をむいて恍惚の表情だ。エリーゼは驚嘆して声も出ない。

「驚いたでしょ！この魚はね、自分で自分の身を飛ばして食べさせてくれるの！しかも生きてるから新鮮よー。」

パテラは刺さった身を口に入れて頬をほころばす。

エリーゼもフォークを近づけると、同じように身が飛び出し刺さる。

魚はまたも恍惚の表情を浮かべる。

食べると、まるで口に大海が広がつてゆくような豪快かつ纖細な味。踊るようにのどをすり抜けていく。

「おいしい！」

2人はあきることなく、はしゃいで食べ続けた。

最後の身を飛ばすと、魚は大きく身を震わせて息絶えた。

「これを煮てお雑炊にするんだけど、これがまたおいしいの。」

雪の港で、エリーゼとパテラは船を待っていた。

羽の広い鳥が輪を描いて飛び交っている。

まもなく、透明な船が、豪華な客室を露わに陽の光を反射して、近づいて着岸した。

「アサノハ行きの船が出るぞーーー！」

パテラとは隣の部屋だ。

片手をあげて別れた後、自分の客室に入る。

一瞬、広い部屋が海に浮かんでいる感覚になった。

海に面した壁は全面窓。

「わー。」

水平線はずつと、海と空を分け続けてるのかしら。

家族がいたら何て言うかな。

パテラと会えて、楽しくなつてきた。

部屋のお風呂を見てみる。

隣のパテラの部屋からもかすかに水の音がする。

お湯を張つた湯船に、香草をいくつも入れて何ともお姫様にでもなつた気分だ。

アサノハに着いても何とかなるわ。

体が熱くなり、楽天的に笑つた。

穏やかな海を眺めながら着がえをすまして、ジュースを飲んでいると、ノックの音がしてパテラの声がした。

「テラスに行きましょう。」

パテラも、今度はルビー色とスカーレットのドレスに着替えて、つばの広い薄い帽子をかぶつていた。

同じ香草の香りがしている。

テラスに上がると、潮風に髪がなびく。

波の音が遠くに響きわたる。

「空を飛べるよくなつたら、私も連れてつて。」

「うん。」

パテラが風にはためく帽子をおたえて、遠くの縁を見つめる。恋人のことと思つてゐるのだろうか。

その時、船の近くの海上に巨大なものが現れた。

最初は大きな岩かと思つたが、首が波しぶきを上げて出でた。

「大獸だわ！ キヤー珍しい！」

パテラが表情を一転させて叫ぶ。

現れたのは、小さな島ほどもあるカメだった。

ボーッと太く鳴く。

テラスにいた他の客も端に集まり驚きはしゃぐ。

「皆さま、右手の海に現れたのは「ウミ」と云つ大獸です。」

アナウンスが楽しげに話し出した。

「小さな海ほどもあるのでこの名前がつきました。

100年に一度しか姿を現さないといわれ、我々船員も実際に見たのはこれが初めてです。

危害を加えないおとなしい性質なので心配ありません。

「ウミを見た者には、とんでもない幸福か、とんでもない不幸が舞い降りるといわれています。

皆さまには幸福が訪れますよ、船員一同、心よりお祈り申し上げております。」

「ウミはさわぐ船を氣にもかけず、日光浴をしてゐるよだ。甲羅の上で海鳥が何かついたばんでいる。だんだんと遠ざかっていく。

夜の船内の料理もまた豪華だった。

静かにゆるやかに音楽が流れる。

「また明日ね。」

「また明日。」

パテラと別れて部屋に戻る。

夜の海は黒に眠り、星空が歌っていた。

朝日がカーテン「じこさしこみ、部屋の中を照らす。髪を整えていると腹が鳴った。

美味しいものばかり食べてるからお腹が甘えてるわ。

パテラの部屋をノックすると、寝抜けたパテラが出てきた。

「おはよづ。」

テラスで朝食を食べた。

日の光が暖かい。

パテラは今日は薄緑色のふんわりしたパンツスタイルだった。パテラが着がえている間にエリーゼはパテラの服を何着か進呈してもらえてホクホクしている。

「いよいよアサノハね。」

「うん。どうしようかなー。」

「バベルのことなんだけど、たしか完璧にいなくなつたのはそつ昔のことじやないのよね?」

「うん。たしか・・・お母さんが子供の頃にはいた気がするつて。

「それじゃあ、街のお年寄りに聞いたら何か分かるんじゃないかな
ら。」

「あ、そうね。」

「私のおばあちゃん、かなりの歳で、頭もしつかりしてるから、よ
かつたらウチ寄る?」

「え、ホント? 助かるなー。」

だんだん道が明るくなつてきた。

思えば、魔力がなくなつたおかげで、こつしてパテラに会えて、パ
テラのアドバイスで道が明るくなつたんだ。

きつとうまくいくわ。

バベルにも必ず会える。そんな気がする。

パテラとビリヤードやスロットをして遊んでいると、昼になり、船

が速力をゆるめた。

外には遠く、白い街が見える。

「アサノハよ。キレイな所でしょ。」

白い壁をパステルの屋根が太陽を向いて斜面に整然と建ち並んでいた。

港には多くの迎えが待つている。

「アサノハ。アサノハです。」

港に下りると、パテラが手を振り、パテラの両親がかけよつてきた。

「おかえり。」

「ただいま。」

「この娘は？」

「エリーゼです。初めまして。」

「リモーネの列車で会つたの。用があつて、おばあちゃんに話聞きたいんだ。いる？」

「ああ。さつきジョギングから帰つたとこだよ。」

「あ、そう。元気ねー。」

白い階段を昇つて、パテラの家に案内される。

日差しが熱い。

白いしつくいを塗り直している職人。

高台からは海が見渡せた。

円い葉の白い樹が木陰をつくつている。

「いいよ。」

パテラの家は他の家と同じく真つ白なしつくいの壁で、淡い緑と深緑の屋根だった。

庭には白と薄茶のブチの犬がエリーゼを吠えたてている。

「おじやまします。」

「今、レモンティーおもひしますね。おばあちゃんは2階にいると思つわ。」

パテラの母が荷物をあずかつて言つ。

パテラと2階に上ると、

「おかれり。早かつたね。」

ヒカル通りのダラダラが聞こえた。

声のした部屋に入ると、細い老婆がスクワットを猛烈な勢いでして
いた。

「たたこ瓶」は、日本で最も古くから使われて来た瓶の一種。

卷之三

エリカの会議

「おや友達かい？かわいい子だね。」

「ユーハさんはあわやん、バベルについて知ってる？」

「バベル？あの魔法使いの？」

「うん。エリーゼが用があるの。」

卷之二十一

ええ、なはかお知りのことかおありたてたら教えていたたぎた
りんです。

「バベルのことですか？」

突然思いもよらぬ質問をされて、トーナは上を向いて考える。

「たしか……私が子供の頃はもう大魔法使いとして有名だったね。あまりいい話は聞かなかつたけど……。それで、死んだとか何とかでパツタリ話が止んだね。3・40年前のことだよ。」

ハベ川は生きているといわれます

「へー、ホントかね。そりや驚いた。」

「バベルが・・・・・・いそ うな 所と か、心 当たり ありま せん

九

腕を組んでうがつ出すトモ

3人はレモンティーを考えながら飲む。

道が明るくなるってどういうことかしり。

この近くにいるのか・・・・・・・それとも何かバベルのヒント

があるの・・・・・・?

「この街を出ると、お一きな平原がある。」

トーナが手ぶりをして話し出す。

「けどその平原には遊牧民がいるから、バベルがいたらとっくに見つかつてるはずさね。」

うなずくパテラとエリーゼ。

「平原を抜けると、山が重なっている。木がうつそつと茂った森みたいな山が、続いてるのさ。何個も何個も・・・。」

私はそこまで行つたことがないから、断言はできないが、言ひ伝えがある。」

真剣な顔でうなずくエリーゼ。

「その山をいくつ越えた奥に、凍る（こお）森もりという山がある。そこは草木も凍る程に寒く、動くものは一つ無い死の世界。入った数少ない人は言葉を失つて戻つてくる、といわれている。」

「凍る森の山・・・・。」

「バベルがいると考えられるのは、このあたりではそれぐらいじゃないかね。」

「ありがとうござります。」

「どうするの?」

パテラが聞く。

「行つてみるわ。」

「どうやって!遠いわよ。それに山を越えないといけないのよ。」

「・・・・・・魔力が少しだけ戻ってきたような気がしてたの。」

「大丈夫だと思う。・・・・・。」

「あんたも魔力があるのかい?」

トーナが珍しそうにエリーゼを見る。

「ええ。空を飛べるだけなんすけど。」

「へー。いいねー。私が小さい頃は魔法が使える人は少しだけはいたけど、今となつちゃ珍しいねー。」

なつかしむトーナ。

「あ、じゃあ、寒いそだから、私のコートかしてあげるわ。」
パテラが自分の部屋から、フサフサの毛皮のついた白いコートと帽子を持つてくれる。

街の門に立つ。

風に平原が波を揺らしている。

「バベルに会つたらよろしく言つといへ。」

パテラがエリーゼの肩を叩く。

「変なことされないよつ氣をつけな。」

トーナが握手する。

「じゃあ、行つてきます。」

水色の弱い光がエリーゼを包む。

髪がたゆたつて体が浮く。

「やつぱりまだ本調子じゃないけど、低い所なら大丈夫よね。」

「気をつけてね！」

手をあげて飛び出すエリーゼ。

パテラとトーナは歓声をあげて手を振る。

低く、短い草ギリギリを飛んでいく。

せせらぐ小川に沿つて。

川に沿えば山の間を抜けられる、とトーナが教えてくれた。

遠くに茶色いマリコが群れていた。

遊牧民のテントも見える。

ひづめの音がしたので、ふりかえると、足の速い蒼い動物に乗った老人が追いかけて来ていた。

「どこへ行くんだ！？」

口に手を添えて大声で聞く。

「凍る森よ。」

速度をゆるめて答える。

「凍る森だつて！？やめといた方がいい。あそこには悪魔がある。」
バベルのことかしら。

「いいえ。行くわ。心配してくれてありがとう。」

「幸運を祈る。」

手綱をひいて引き返していく。

川は幾重にも重なる山々の間を流れていた。

紅葉の森や、熱帯の森、鳥ばっかりいる森や、動物ばっかりいる森、その他いろんな森の山を抜けた。

「あつ！」

川に囮まれて1つの大きな山があつた。
見ただけで分かった。

凍る森の山だ・・・・・・・・。

山を覆う樹々は青く、葉は鋭く雪のよひに白い。
近くにいるだけで冷気が襲つてきた。

息を飲んで、パテラの白いコートを着こむ。
ゆっくり川岸に下りる。

音は全くしない。

静寂そのもの。

風の音もしない。

耳が痛い程だ。

パテラの帽子は耳まで隠れて好都合だった。
森に足を入れる。

青と銀の地面はシャリッと音をたてて少し沈んだ。
なんて寒い・・・・。

吐く息はダイヤモンドダストのよひにキラキラと落ちていく。
コートの上からでも氷に抱かれてるよひだ。

「バベルさん・・・・・。」

消え入るよひな小声で呼ぶ。

シャリシャリと地面をふみしめて山に分け入つていく。
パリ。

エリーゼの肩があたつた枝が、いつももろく折れ、粉々になりなが

ら崩れ落ちた。

手を葉に近づけると、触れるか触れないかのところで、音もなく割れ、氷の粒になつて輝いて地面へ降る。

「なんて、・・・・ところなの・・・・。」

風が吹いたら、何もかも崩れ壊れ、なくなつてしまいそう。早くバベルを見つけないと。

凍死してしまう。

それになんだか・・・・怖い。

エリーゼが歩いた道が、トンネルのようになつて開いていく。少し早足で、もうずいぶん歩いた。

上に行くにつれ、樹の幹もだんだん大きく太くなつて行く。もう寒さの限界。

唇は止まらずに震えつづける。

キラリと、青い森の中に金色の小さい光がエリーゼの目に映つた。力をふりしぼつて、そちらに歩いてゆく。

それは見慣れないものだった。

初めて見ると棺ひつきのようになつて見えた。

地べたより少し高段の所に、ポツリとそれだけが金色の静かな光をたたえて置いてある。

宝箱のようにも見える。

「何かしら・・・・・・・・・・。」

人一人入れる大きさだ。

もしかして、この中にバベルが？

そうだといい。

早くここから出たい。

金色のそれに触れる。

森と同じくらい冷たい。

「バベルさん？」

静かに呼びかけるが、返事はない。

フタを動かそうとするが、ピッタリと重く動かない。

ノックする。

「バベルさん？」

少し大きく呼ぶ。

その声がこだまして、葉が何枚か壊れてチラチラと降つてきた。

「バベルさん！」

ゴンゴンと叩く。

もう何でもいいから出てきて！

夢を見ていた。

短い夢を数え切れぬほど。

まぶたの中はいつも真っ暗だ。

久しぶりに目を開く。

ゴンゴンと叩く音がしたからだ。

外から「バベル！」と叫ぶ女の声がする。

手のひらでフタをゆっくりと押し開く。

「バベル！」

もう何度も呼んだ。

さん付けもやめていた。

「バベル！」

死んじやう。

寒くてどうしようもなく寒い。

「バベル！バベル！」

ゴンゴン叩く。

これは本当に棺？

死んでしまったの？

「バベル！バベル！バベル！バベル！」

森に壊れた葉が雪のように曲線を描いて降り止まない。

キラキラ、こんな時でも美しく感じる。

泣きそうになつて息をついた時、フタが突然音を立てて動いた。

息が止まる。

開いた間から、顔がのそぐ。

白い髪、青白い顔、青い眉毛、黄緑の瞳がエリーゼを不思議そうに見る。

「あなたは・・・・・・・・?」
中性的な顔で、ヒリーセが少し年上ぐらしひそ見えた。

エリー ゼはポカンとして言う。

男は身を起こし、あたりを見回してから言つ。

君は？

エリーゼ

「バベルなのね？」

ハベルだよ、君は何？」

す

エリーは寒くて震えていた

アーティストの名前を記入する欄

混ざった金色の毛が光る。

箱から、これもまた真っ青のシリグハートを取り出す

ヒリニヤな満ちむ氣力もばくへ、ホシヤツリヤ。

「あ、それと、これは・・・・。」

ハヘルは腰をかかめて
脣は指をあてる

てんで子供扱い。

ヒーラーは少しだけとしました。

バベルは構わず、森の奥に歩き出し、エリーゼは後をついていく。

太い樹と樹の間に手をかざすと白い扉が現れた。

「どうぞ。」

ガチャリ。

扉の中には温かい空氣、そして夢みたいに花々が咲き乱れ、咲きこぼれていた。

白紫の花穂からは濃厚な香りが立ち昇る。

寒さから逃れて、心底エリーゼはホッとして涙が出そうになつた。バベルは花や葉に触つてから、奥のテーブルについた。エリーゼにもそばのイスに座るようすすめる。

「さて、ご用件は？」

テーブルにはコーヒーの入つた優美なカップが2つ、いつのまにか出現し、湯気を立てていた。

「あ、あの、私、エリーゼといつて、アパローゼの町から來ました。

「いろいろあつて何を話せばいいのか、じぶんもじぶんになつてしまいそうだ。

この世界に大きな変化が生じよつとしている長の言葉から、空を飛べなくなつて、長い道程を経て、やつとここまで来たことを長い時間をかけて話した。

話し終えるとバベルはふーんと鼻で言つた。

「それは大変だったね。天女が羽衣をなくしたみたいだ。ここを見つけるとは大したものだ。

その大きな変化というのは、・・・・・・おそらく月の怪物のことだね。」

「月の怪物？」

「知らないの？」

エリーゼはうなずく。

バベルは呆れたようにエリーゼを見て、テーブルに焼きたてのクッキーの盛られた皿を出現させた。

「君が魔力を出せなくなつたのは、この世界の魔力の調和が大きく

狂ったせいだ。

月の怪物というのはね、大昔、といつても、600年くらい前だけど、この世界を破滅させそうになつた怪物のことなんだ。

まあけど、いろいろ戦つてゐるうちに、どうにか怪物を魔法の殻に閉じ込める成功したんだよ。それが月さ。

「月？ あの月が・・・・・？」

エリーゼはクツキーを口からこぼす。

「そう。しかし閉じ込めただけで、いなくなつたわけじゃない。その殻をうち破る力をたくわえて、出でることだって、考えられる。

ちょうど鳥のひながふ化するようにね。

「その時が来たということだよ。」

バベルは淡々と話す。

「伝説とか、言い伝えになつてないのかな。」

「もしかしてあれかしら。」

「何？」

「悪さばかりする獣がいて、それを見かねた神様が、星の小箱に入れて、海の中に沈めてしまつたつていうお話があるわ。」

「ずいぶん口マンチックな物語になつたもんだな。」

バベルは吐き捨てるように言った。

「ともかくその凶悪な怪物が目覚めようとしてるのさ。魔力を感じれば分かる。」

「なら大変。助かる方法はないんですか？」

「さあ。戦うしかないんじやないかな？」

まるで他人事のように言つ。

ガツカリした様子のエリーゼを見て、バベルが付け足す。

「しかし、当時は魔力がもつと溢れてて、人々は今よりずっと力があつたっていうから。それを全部合わせて、やつと閉じ込めることができたわけだから。

今の人々ではとても、歯がたたないだろうね。」

全くフォローになつてない。

話を変える。

「バベルさんはどれくらい生きていらっしゃるんですか？」

「だいたい、180歳くらいだね。40年眠つてたけど。」

エリーゼはバベルを見て驚く。

180歳といえばエリーゼの10倍以上ある。

「バベルさんは、大魔法使いつて、・・・・・・・・伝説になつてます。」

「ああそりなんだ・・・・・・・・。」

ちつとも嬉しそうな顔ではない。

「よかつたら力をかしてくれませんか？」

このままじゃ、お母さんもお父さんもお兄ちゃんも、みんなみんな、
・・・・・・・・あなただって死んじゃつかもしないんですよ？」

「嫌だね。力になる気はない。」

「え？」

あまりの冷たい返事に言葉が出ない。

「どうして・・・・・・・・？」

「どうしてって、別にどうだつていいから。

助かりたいなら自分らで戦えばいい。

僕はいいや。」

「・・・・・・・・」

「このままじゃ、お金が無くて帰れないんだろ。魔力も消えそうな感じだし、それは治してあげるよ。

そしたら帰りなさい。」

エリーゼはうつむいて黙つたままだ。

「僕は治せないから、知り合いのところに連れてくよ。もう大丈夫だろ？ おいで。」

エリーゼは黙つてバベルについていく。
バベルの後ろ姿、白い髪がゆらめく。
少し歩くと大雪原に出た。

バベルは立ち止まり、キヨロキヨロする。

「そろそろ来るぞ。」

小さな地鳴りが響き始めた。

遠くに雪煙が舞いあがる。

その中心には薄い板のようなものが2枚、こちらに立つて滑つて来る。

「あれ何！？」

「ハネさ。雪羽氷鱗つていう大獸だよ。回遊してるんだ。知り合いの所まで連れてつてもらおう。」

ハネが近づいてきた。

たしかに巨大なサファイア色の羽が、雪を切り裂いている。

バベルがエリーゼのうでをつかむ。

思わずドキッとする。

手は少し冷たい。

バベルは、雪煙をあげながら田の前を走る羽にすかさずつかまり、根元のあたりに乗る。

エリーゼもバランスをくずしながら乗る。

「久しぶりだな。」

バベルは羽をポンポンたたく。

「すぐ着くよ。引っ越してなればだけだ。」

猛スピードでハネは滑つてゆく。

もう空は夕日に明るい。

バベルは行く先をじつと見ている。

風に髪がたゆたう。

バベルに力をかしてもらつにはどうしたらいいのかな。

長様にどう話せばいいの・・・・・・・・。

初めて知ることばかりでエリーゼは疲れていた。

「見えてきた。」

バベルが指さす方向に、薄い青色の塔が見えた。

青の屋根に水色のしつくいの壁で、六角柱の塔だ。

バベルはまたもエリーゼのうでをつかんで、ハネから飛びおりた。

「バベル！」

塔の方から声がした。

「アンジェラ！」

バベルも笑つて呼び返す。

塔の扉が開いて、こっちに一つの影が宙に浮いて滑ってきた。

それは大きなカエルだった。

「魔獸！？」

エリーゼは身がまえる。

「違うよ。古い友人さ。アンジェラっていうんだ。」

アンジェラはバベルの前に降り、2本足で立つてバベルと両手で握手した。

シルクの着物を着ていた。

「久しぶりだなー。元気だつた？」

「ああ、ちょっと眠つてた。」

「」の子は？

固まつているエリーゼを見る。

「エリーゼつていう。僕を訪ねてきてくれたんだ。ほら、月の、さ。

「ああ・・・・、あれか。」

アンジェラは頭を伏せる。

「まあ入つて。」

塔は近くで見ると相当に高く、扉もエリーゼの3倍はあった。

アンジェラが近づくと自動で扉が開く。

中は異様な光景だった。

ふきぬけで、壁という壁、宙に浮く無数の棚に不可思議なものがぎつしりとつめられていた。

そして最も目につくのが鍵だった。

無限にあるのではないかと思えるほど、多くの鍵が壁に渡された糸に吊り下がられていた。

わあ

「魔力が乱れてるだろ？ それで、このヒーローが空を飛べなくなつて帰れないんだよ。

治してくれるか?

「ああ。ちよつと診せへり」りん。

アンジニアが手招きする。

「きなうアンジ」

いきなりズームが大きめを見開く。瞳からプリズムの光線が放たれ、エリー・ゼの顔を包む。

「...」

エリー セはたまらず呴ふ

バベルは笑つていた。

アンジェラも苦笑している。

「まあ、」Jの乱れの影響を受けたんだね。 1日あつたら薬でもねよ。

「あ、ありがとうございます。」

顔を赤らめて申し訳なさそうにお辞儀をす。

「疲れたろう?少し休みな

エリーゼはさうしてた赤いイスに座る。

バベルとアンジェラもイスに座つて話している。

旧交を暖めているようだ。

しばらく辺りを見回していたが、エリー セをまるで気にかけていない2人の様子に、しだいに緊張もほどけて、気づいたら眠りに入つ

ていた。

目が覚めると、窓の外はもう暗かつた。

「あ、すいません、寝ちゃつて。・・・・・」

アンジエラは細かい実をすりつぶしていた。

バベルの姿はみえない。

「あ、起きた？」

「はい。・・・・・バベルさんは・・・？」

「久しぶりに空の散歩してくるつてさ。」

空を飛べるならアパローゼまで連れて行つてくれたらいいのに・・・

・・・。

「お腹空かないかな？何か食べようか。」

そういうえば空腹だった。

「いただきます。」

アンジエラはテーブルにテーブルクロスをしいてから、近くの鍵を1つとつて、虚空にさしこんだ。

空間にドアが現れ、中に入り消えてしまった。

不思議なこともあるものだ。

空を飛べる自分はそつと珍しいと思つていたけど、こんな世界もあつたのね。

アンジエラが出てきた。

遅れて、豪華極まる料理達がぞろぞろとついてきた。

「いただきます。」

どれもこれも、正に魔法の如き美味しさだった。

アンジエラに対する警戒心ももはや消えていた。

「月の・・・怪物のことなんですけど。」

食べながら話す。

「うん？」

「本当に本当なんですか？」

「ああ本当だよ。もう人は忘れてしましたみたいだけど。」

「出で来たら・・・・・・・・・。」

「破滅だらうね。今度こそ。」

「・・・・・・・・。」

「しようがないよ。力は歴然の差だもの。」

アンジエラは鳥の丸焼きを一飲みにして呑つ。

「前は、どうやって閉じ込めたんですか？」

「んー、まず怪物に荒れに荒らされた世界に一人の天使が突然現れたんだよ。

その天使は、全ての生き物達の魔力を、高めたうえで一気に解き放つた。

それでも閉じ込めるのがやつとで、天使はいつのまにかいなくなってしまったんだ。」

「じゃあ今の私達には・・・」

「とうてい、勝ち目は無いね。そのことがあつてから、地上の魔力はどんどん弱くなつていつたんだ。

バベルは特別さ。」

「バベルさんはどうして力になつてくれないの？」

「・・・・・・・・バベルも疲れちゃつたんじやないかな。

いろいろあつたからね。」

「いろいろつて・・・？」

「バベルは力が大きすぎるんだ。人間の身で、どんな魔獣も、過去の偉大な魔法使いも敵わない、すごい力を持つてるんだ。

けど、大きすぎる力は、時にはいるだけで人を傷付けてしまうようで・・・、初めはバベルがどの国の味方かで、戦争が始まつたんだ。」

「戦争？」

「バベルはどつちの味方でもないし、自由に生きていたかつたようだけど・・・・・。」

それから戦争は、バベルを悪にして、バベルを追つたんだ・・・・。ひどいもんだつたよ。バベルが立ちよつた町が焼き払われたこともあつた・・・・・。

いっぱい生き物が死んだ。

それでバベルは長い眠りに入つたんだね。」

アンジェラは悲しそうに話す。

「だからどうかバベルを責めないで。いい奴なんだよ。とつても。

「 本当は ・・・ 」

アンジエラが涙ぐむ。

「バベルは……戦争でケガをしたの？」

エリーゼか心配で、に置く

「そんなバベルじゃないよ。バベルの魔法つたら、それは鮮やかなもんだ。やううと思えば人間を、・・・・・いや、そんな事はしないけど。

「アーティストの才能」

それくらいスゴイんだ、バベルは。

ヒーラーが小声で言つた。

2人は黙り合う。

アンジエラは水玉模様の鍵を外し、虚空にさしむと、今度のドアの中には広い浴室があつた。

「アリガト。

「ペジヤマが死んでしまった。」

シレクのペジヤマが置いてある。

アが閉まると言は向もしなー。

広い湯船につかって、エリー・ゼは考えこむ。

どうすればいいの・・・・・・・

その頃、アンジェラの塔の扉が開いてバベルが入ってきた。

アンジロ市は蘇いドービーをすすめる。

いし子たね あの子

卷之二

興味を示そうとせず、「コーヒーを飲むバベル。

「怪物はいつ頃、出てくるかな。」

バベルが窓の月を見て言つ。

「早くて10日、遅くとも1月は過ぎないだろうね。^{ひとつま}」

アンジエラがゴリゴリとすりつぶして応える。

「バベル、おいら考えたんだけど、どうせ終わるなら、最後に全力を出し切つてみて終わるのもいいんじゃないかって……。」

「？」

バベルはアンジエラを見る。

「ほら、バベルは、…………抑えてただろ？」

太古に伝わる月の怪物、最後の最後に全力を出す相手が、あの力そのもの、力の神とも畏れられる怪物。バベルだつて惜しみなく渾身の力を爆発させられるんじやないか、…………初めて。」

バベルはしばらく黙つて、手のひらを見つめる。

「そう、…………そうだな。…………そうかもしない。」

バベルの体から炎のよう魔力が立ち昇る。

やる気になつたようだ。

アンジエラは内心ホッとした。

バベル、このまま終わつたら、君が悲しそうる…………。

エリーゼがシルクのパジャマで出て來た。

バベルが話しかける。

「怪物はなんとかするよ。」

「え？」

アンジエラが小さく笑いかける。
どんな魔法を使つたのかしら。

「けど誰のためでもない。自分のためにね。」

アンジエラはエリーゼを寝室に通す。

「ありがとう。」

「いや。ぐつすつねやすみ。」

エリー・ゼが横になつたベッドを、アンジエラが大きな泡で包む。静かに海の波音がする。自然に深い眠りにへる。

自然と深い眼にに入れた

「僕も先に眠るよ」

ああ、せーはりあんなに眠っても眠くなるんだね

ああ また寝足りないよ

笑い合って、バベルはベッドに横になるが、目は開いていた。

アンジエラはまだ本を読んで薬を作りつづけていた。

「あれ、どうしたんだい？」

卷之三

「アーティストの才能を引き出すためのアートセラピー」

「業者との連携を第一に協力を頼んでください。

田代の翻訳本で、この

ମାତ୍ରାଲିଙ୍ଗାରୀରୁ ଅପାରାମାରୁ

「やるからには勝つてみたい！」

「勝つ？ 勝つって・・・・・・・

•
•
•
•
•
○

「ああ。」

いや、それは……………ダメだ。閉じ込めるだけでいい

んた
そニ「レヤなしと
・
・
・
」

・ そんたへやにしなしよ 大丈夫 ・・・ じゃあおやすみ 」

ハベルは寝室に戻る

それを一々見ぬる

次の日の朝、バベル、エリーゼ、アンジェラが塔の前に立っていた。

「じゃあ5日後、ここで。」

アンジョラは鍵の束を体に巻きつけている。

「ああ、よろしく。じゃあ行こう。」

バベルがエリーゼに囁く。

エリーゼは今朝アンジョラにもらった薬を飲んでから、魔力が戻つてきているのを感じていた。

エリーゼが力を集中すると、水色の光が体を包み、フワリと軽く浮いた。

バベルの体が白く光る。

バベルの背中に真っ白の細く長い羽が現れた。

「羽がはつきり見えるわ。キレイ…………。」

「ん？ ああ。」

バベルとエリーゼが空高く飛び立つ。

見届けたアンジョラは、鍵を虚空にさしこみ入つて消えた。

「これからどうするの？』

飛びながらエリーゼが聞く。

下には山が続く。

「まず、君をアパローまで送る。どうせ通り道だからね。それから、古い友人を訪ね飛ぶ。」

バベルの声はよく通る。

「あ！」

平原の上まで来た時、エリーゼが声をあげた。

「ん？」

「私、リモーネに用がある。」

「？ ああ、ナイフか。」

「うん。けどお金が無いわ。」

困つてバベルを見る。

「僕も持つてないな。魔法で出すことはできるよ。650クレシだつたね。」

「いえ、それはちょっと、ちゃんとしたお金じゃないと……。
うーんと飛びながら考へこむエリーゼ。

「じゃあ僕の宝石をあげるよ。売つたらこくらかにはなるだらう。バベルは手のひらから色が不思議に乱反射する宝石をこくらか出して、エリーゼに渡す。

「いいの？」

「いいよ。もうこらないし、こっぽこもつてるから。」

「ありがとう・・・・・！」

エリーゼは、この宝石をあげた方が兄は喜ぶかもしねないと思った。

アサノハが見えてきた。

「私、このコートをかしてくれた人に返さないといけないの。」

「あ、そ。じゃあね。」

「ちょっと待つて。」

バベルの言葉を聞かず、エリーゼは街に下りていく。
バベルはため息をついて空に漂つ。

パテラの家の前に着地する。

2階の窓からトーナが手を振つていた。
ノックするとパテラが出てきた。

「ちゃんと念えたわ。いろいろありがと。コート、ホントーに助かつた。」

「そう、本当にいたのね。私も会つてみたいわー。」

「あ、今あそここ・・・・・。」

空を指すエリーゼ。

バベルの姿はビリにもない。

「あれ？」

「どー?」

パテラは眩しそうにキヨロキヨロする。

「ちょっといなくなっちゃった。」めん。また今度、せつと会ってこ
くるから。」

エリーゼは急いで飛び出す。

バベルは港の灯台の上にはためく旗の頂点に座っていた。

「こんな所にいた。用はすみました。」

2人は飛び立つ。

バベルの羽が風をなでて空を滑つてゆく。

「本当に、・・・・・助かります？」

「さあ、五分五分といったところだらう。

怪物がどれだけ力があるかどうか見たわけじゃないから。」

「また月に閉じ込めるの？」

「・・・・・まだ分からぬよ。古い友人達と話してからの話。」

遠くに海鳴りがする。

「ここからもう1人で帰れるだろ？」

海の上でバベルが止まって立つ。

「え？」

「ちよつと知り合いがこの近くにいるのを思い出した。横道だから、

ここで別れよう。」

「・・・・・・・・・。」

ちよつと残念だ。

「私、ついていっても・・・・・・・・・い？」

「?どうして？」

「世界を救うヒーローを見てみたいの。自慢できるわ。」

「そんなもんじゃないけど、・・・・・・・・別にいじよ。少し危
ないところだよ。」

「大丈夫よ。」

嬉しそうに胸をはるエリーゼ。

方向転換して沖に向かう。

「いた、いた。」

遠い島を見てバベルが笑う。

島というより、山が海から突き出している風だつた。

山からは煙がもうもうとあがって、その煙の中からなにか音が響いてくる。

「ドラゴンだわ！」

煙から青いドラゴンが翼をばたかせ、飛び出してきた。

煙の中から燃えさかる炎が追つてくる。

青いドラゴンは煙の中をにらみつけ、口から青い炎を猛烈に煙の中へ噴きあげる。

それを避けるように、煙の中からもう一匹、赤いドラゴンが飛び出してきた。

2匹は戦い合つていいようだ。

「おーい！」

バベルが青いドラゴンに近づく。

エリーゼもバベルの後ろに隠れてついていく。

バベルとエリーゼを透明な膜が包む。

熱さがやわらいだ。

「バベル！」

青いドラゴンが戦いながらバベルを見る。

眼下には大きな火口が、鈍く赤く光るマグマを煮え立たせていた。

「久しぶり！相変わらずだな！」

バベルはニコやかに話す。

青いドラゴンが右に左に飛び回りながら、青い炎を吐く。

バベルとエリーゼはそれについていく。

「例の用のことで話があるんだ！」

「んー！？ああ！」

「戦うつもりでいるんだ！君達にも力をかしてほしい！」

「ああ！俺もムシャクシャしてるところだ！いつでも力になるぞー！」

「ありがとう！ムーテヨにも話してくるよ。」

青と赤のドラゴンは絶えず激しく戦いつづけている。
巻き込まれないですんでいるのは、バベルが巧く守ってくれている
からだらう。

赤いドラゴンの近くにくる。

「ムーテヨー久しぶり！」

「おお！バベル！」

ガオーッと青いドラゴンに炎をまきちらしながら応える。

「かくかくしかじかで、力をかしてくれ！」

「ああ！いいとも！カヴォンよりは力になれるぞ！」

「ありがとう！その時にまた！」

海に引き返すバベルとエリーゼ。

後ろでは赤と青のドラゴンが戦いつづけている。

「いつもああなんだ。面白いだろ？」

バベルがクスクス笑う。

エリーゼは力と力のぶつかり合いに目を白黒させていた。

リモーネの街に夜頃ついた。

ネオンがキラびやかにまたたいていた。

バベルは街で一番高い家の屋根の上の風見鶏の上に立つている。

エリーゼは宝石店にいた。

「これはすごい！貴重な宝石だよ。魔力も入ってるようだ。」

主人がバベルの宝石を覗いて興奮している。

「これは650クレシどころじやない。これとあと二くらほしい？」

兄のナイフを返してもらつて、エリーゼは少し考える。

「あと、食事できるお金があれば・・・。あずかってくれてありが
とう。」

「本当かい？いやー、もうけたもうけた。」

多めの食事代とナイフを持って店の外に出た。
屋台でいろんな食べ物を買って、バベルに渡す。
屋根の上で2人で食べた。

「へー、美味しい。」

「レストランで食べたらもつと美味しいのよ。」

「これで充分だよ。」

その夜はエリーゼは宿をとつて、バベルは空で寝た。バベルもエリーゼも月を見ていた。

少し大きくなつたようだ。

アパローゼの町に飛ぶエリーゼとバベル。

大清湖が見えた。

「ねえ、私の町に寄つていきません?」

「嬉しいけど遠慮しとくよ。」

「とつても素敵なところなの。風薫る（かぜかお）町つて呼ばれてるのよ。」

「へえ・・・けどお邪魔だから。」

「どうして？そんなことないわ。みんなきつと喜ぶ。長様も何かいいアドバイスぐださるかも。」

「いや、遠慮しとくよ。」

バベルは遠くを見ている。

羽が日の光を白く受けている。

「・・・・・・・・・・アンジエラさんから聞いたけど、・・・・・もうバベルさんを恐がる人なんていない。みんな大歓迎すると思う。」

バベルは悲しそうにほほ笑む。

「いいんだ。僕が自分で1人を選んだんだ。お願いだから、僕に同情はいらない。」

エリーゼは黙る。

「怪物と戦つのも、自分のためさ。自分の力を全て、試してみたいんだ。」

「誰かのためになんて・・・無責任だよ。」

「そんな、そんなことない。誰かのために何かができるって素晴らしいだ。」

しいことよ。

1人で生きるなんて寂しいだけじゃない。

喜びも分かち合えないなんて。」

「分かつたようなこというな！」

バベルが怒りをあらわに怒鳴る。

エリーゼは驚いて黙ってしまう。

「・・・・もううんざりだ・・・・・。」

エリーゼは下を向いて深く沈んでるようだ。

こんなに人に厳しく、はねつけられたのは初めてのことだった。

ハツと反省したようにバベルが話す。

「悪かった。君の気持ちは嬉しいよ、ありがとう。けど、そういう気分になれないんだ。」

エリーゼはかすかにうなずく。

「それじゃあ、ここでお別れだ。」

アパローーゼの田園がま近に見えるところで2人は止まる。

「お達者で。」

「これからどこへ行くの？」

「パルノンの山に巨人がいるのは知ってるだろ？」

「あの、空を支えてるつていう？」

「ん？ああ、そうそう。そいつに会いに行くんだ。」

「伝説かと思つてた。」

「まあね。じゃあ。」

バベルが手をあげて、飛び去つていく。

エリーゼも手をあげ返すが、バベルはもう小さくなつていた。

「ただいま。」

「エリーゼーおかえり。・・・・・どうしたの？会えなかつたの？」

沈んだエリーゼを見て母親が聞く。

「ううん。会えた。」

「あら、そつ・・・疲れたでしょ。長様の所に報告に行つて。おつかれておくわ。お腹は？」

「大丈夫・・・・・。」

「エリー・ゼ、おかえり。バベルは？」

兄が階段を下りてきた。

「・・・・・・はい、これ。」

カバンから出したナイフと小さな宝石を兄に渡す。バベルのをちよろまかした宝石だ。

「バベルの。」

「え！くれるの？すゞい・うわー、魔力が入つてる…」

兄は大喜びで、母に見せびらかす。

「じゃあ長様の所に行つてくるね・・・・・。」

出でいくエリー・ゼ。

心配そうに見る母。

「そうかい。そんなことが・・・・。」

旅であつたことを一通り話した。

長は厳しい顔でうなずいている。

「だから、怪物はバベルさんたちが何とかしてくれるから、心配ありません。」

「ふむ。」

長は、沈んで小声で話すエリー・ゼに熱いお茶を入れる。

「わしらにできることは、確かにそれくらいかもしけないね・・・・。」

「はい・・・・・。」

長はじつとうつむくエリー・ゼを見る。

「エリー・ゼはバベルを起こす大きな役目を果たした。『苦労だったね。』エリー・ゼはうなだれたままでコクリとうなずく。

「そういう意味では、バベルはエリー・ゼに恩があるといえる。」

「え？」

エリーゼは顔をあげて、長を見る。

「エリーゼが起こさなければ、バベルは力を出す機会を寝過ごしてしまったのだから。

エリーゼはバベルに一花咲かせる、絶好のチャンスを教えてあげたのだよ。」

エリーゼがふんふんとうなずく。

「バベルに今からでも追いつけるかい？」

「え・・・・・多分。」

「なら行っておいで。急いで。」

「でも・・・・・。」

ためらうエリーゼに長が首をふる。

「恩を返してもらい。お前には最後まで見届ける権利がある。見届けてそれを私に話しておくれ。長の命令だ。モタモタせず急ぐんだ。」

「棚に座っていた猫のタレスが頭をふる。
鈴の音が鳴る。

「はい！」

エリーゼは長の家から坂道をかけ下りる。

エリーゼの家の扉を勢いよくあける。

中では母親がスープを作っている。

父が、兄にあげた宝石をのぞいていた。

「あ、おかえりエリーゼ。」

「ごめん、また行つてくる！」

「あ、おい、どこ行くんだ！？」

飛び立つエリーゼ。

父は窓の外にどんどん小さくなるエリーゼをポカンと口を開けて見る。

パルノンの山、トバせば追いつける！

透明だつた羽が、うつすら輪郭を表す。
間に合え！ 真つすぐ前を見すえる。

もうすぐパルノンの山。

險しく切りたつた山々が空を突く
風が山にぶつかり唸り声をあげている。
その音に混じつて小さく声がした。

「
」

卷之三

ふりむくと云ふ

「バベール！」

「船は・・・・・、」
「」

「何? どうして物語の話のか?」

「違うわ。ハーハー。見に来たの。ハーハー。」

「國學」研究

「全てを。最後まで見届けるの。」

卷之三

「ホント？」

「そりゃ別に君の曲だよ、邪魔もえしなきゃ。」

足手あどいははなせなしれ

「ただついてくるだけだろ？足手まとこにもならないよ。」

「失礼ね。」

「何で？」

エリーゼはおかしくてクスクス笑い出す。

よく分からぬといつたふうにエリーゼを見るバベル。

「じゃあ行くよ。もうすぐだよ。巨人まで。」

また飛び始める2人。

「空を支えてるなんてスゴイ方に私が会えるなんて。

「まあ実物を見たらガツカリするもんさ。」

「？」

ひとりわ大きな山がそびえていた。

裏に回りこむ。

頂の近くの平らな所に下りる。

前には何も荒野が広がっている。

「・・・・どこにいるの？」

「手を3回たたくんだ。」

2人は3回手をたたく。

少しすると、前に巨大な、山よりも大きい人の輪郭がボンヤリ現れてきた。

だんだん色が濃くなり、巨人の姿になった。

巨人は両腕を大きく広げ、肩の上に重いものを背負っているようなかつこうをしている。

下を向く顔は苦悶の表情だ。

「すごい。ホントに空を支えてらっしゃる。」

「おい、タイ。」

名を呼ばれて、巨人はチラとバベルを見る。

すると、苦悶の表情はやわらぎ、うでもブラリと下ろしてしまった。

「キヤッ、空が崩れるわ。」

「いや、大丈夫だよ。」

バベルの言つ通り空にも辺りにも全く変化はなかつた。

「やあバベル。ずいぶん久しぶりだ。」

巨人のタイの野太い声が響く。

「まだこんなことやつてんのか。」

バベルが言う。

「どういう事…………？」

エリーゼが尋ねる。

「ただのポーズなんだ。この子はエリーゼ。」

「よろしく。」

タイが二口やかにあいさつする。

エリーゼはペコリとお辞儀をする。

「ポーズ？」

タイが笑つて話す。

「その方が都合がいいんだ。巨人はいるだけで邪魔がられるから。何かの役に立つての方が有難がられるからさ。ハハハハハ。」

「そんなん…………。」

ガツカリするエリーゼ。

後ろで音がした。

見ると、老人がしりもちをついていた。

「な、なんじやとー。」

震える手で巨人を指さす老人。

「誰だ？」

バベルがタイに聞く。

「時々お参りに来るおじいさんだ。マズいこと聞かれちやつたなー。」

「ポリポリ頭をかくタイ。」

憤怒の形相で老人は立ち上がり帰ろうとする。

それを光の檻が包む。

バベルが魔法でつかまえたのだ。

「何するつもり！？」

エリーゼがバベルを見る。

「忘れてもらう。信じてた方がいいこともある。」

バベルは岩のかげに老人を連れて行き見えなくなつた。

まさか・・・。

恐しい想像に息を飲むエリーゼ。

少しすると、岩かげから老人とバベルが出てきた。

老人の体からポカポカ湯氣が出ている。

二口やかにバベルとあいさつして老人は帰つていった。全てを忘れてるようだ。

「何をしたの？」

「鶏は3歩歩けば忘れるつていうだろ？」

老人はフロに入つたら忘れるんだ。

フロに入つてもらつた。」

絶対嘘だ。

何か魔法を使つたんだわ・・・・・・。

「それはそうとタイ、月の怪物だ。」

「ああ、そのことだね。アンジェラが先日来て話を聞いたよ。」

「どうする？」

「僕もやってみるよ。」

「そうか。」

その後、タイが荒野の巨大な野牛をつかまえて、焼いて三人で食べた。

「そういえば、この前リヴァイアサンの波調はちようを感じたんだ。」

「リヴァイアサンの？」

口をいっぱいにして話す。

「確かにあれは・・・・・あっちの方で。」

大きな指で方角をさす。

そつちを向いて、バベルは精神を集中させる。

「ホントだ。・・・・・・・リヴァイアサンがついてくれれば百

人力だな・・・・・・・。」

「難しいよ、あの人は・・・・・。」

「いや、・・・・・頼んでみるだけ頼んでみよう。」

巨大な野牛はたちまち骨だけになつた。

「リヴァイアサンつて？」

タイと別れて、バベルとエリーゼはリヴァイアサンの波調を口指して飛んでいた。

「この世界の最初の大獸さ。全ての大獸はリヴァイアサンから生まれたんだ。

一説には、この世界ができたと同時に生まれ落ちたといわれてる。僕も一回しか会つたことないよ。」

「へえ。・・・・・バベルとどっちが強いの？」

エリーゼはバベルの魔力をつかみきれていなかつた。

バベルは笑つて首をかしげる。

「うーん、分からないな。とほつもない人だから。」

「バベルはどれくらい強いの？」

「さあー、・・・・・100回死んでも生き返る自信はあるよ。僕の魔力は不滅さ。」

「じゃあバベルは死なないの？」

「魔力さえ残つてたら。なくなつたら死ぬよ。もうとつくな死んでる歳だからね。」

「ふーん。死なないでね。怪物と戦つても、力は少し残るのよね？」

「・・・・・フフ。そんな無理はしないよ。自分のためだしね。」

バベルは前の話を蒸し返そうとする。

エリーゼは無視して前を向く。

バベルは笑つている。

そろそろ日も落ちかけてきた。

夕暮れが青空に混じつて滲む。

「まだずいぶん遠い。今日はここまでだ。」

バベルは止まる。

エリーゼも魔力を使い続けて疲れていたのでホツとする。

「いいとこ教えてあげよづ。」

バベルは下を覆っている森を指す。

上からは見えなかつたが、森の中こなとじゆびに温泉が湧き出でいた。

多種多様な動物たちがつかつてゐる温泉を通りぬけると、崖から滝が落ちていた。

その滝からも湯氣が出てゐる。

温泉の滝だつた。

「ここは天然の薬湯くすりゆで、魔力まのぢゆにもいい。

湯治客用の宿もあるし、今夜はここに泊まつ。

「でも・・・・・。」

エリーゼはバベルを見る。

「? ああ、そうか。」

バベルは、あいている温泉のまわりをオーロラのカーテンでとりかこむ。

「これでいいだろ?」

湯治客用の宿は最悪だつた。

建物は腐つてゐるし、得体の知れない動物たちが行き来して、匂いもついていた。

「僕は外で寝るわ。」

バベルが顔をしかめて出でていく。

「あ、私も・・・・。」

エリーゼもあわててついていく。

外は肌寒かつたが、温泉のせいいかいつまでも体はあたたかつた。

バベルは静かに飛び立ち、夜に浮かぶ雲を集めて、その上に横になつた。

エリーゼもそれに乗る。する。

「じりじり、きゅうくつだよ。」

「じゃあ、わたしのもつくつてよ。」

「あー、じゃまくさい。」

バベルはもう一つ雲のゆりかごを作る。

エリーゼがそれに乗ると、優しく受け止めてくれた。

夜空に2つの小さな雲が浮かぶ。

「バベルは家族はないの？」

「いたよ。もう亡くなつた。」

「やっぱり魔法使いだつたの？」

「ああ。まあ並のね。」

「悲しかつた？」

「そりやね。」

「泣いた？」

「子供みたいなこと言うなあ。まあ・・・・・・・・。」

魔力がいくら強くても、人を助けられなかつたし、生き返らせる
ともできることを知つたよ。」

「・・・・・・・・・。」

「魔法つてのはよく分からないよ。未だに。」

何のためにあるのか。・・・どう使えばいいのか。

魔力を持つ人はどんどん少なくなつてゐるけど、それでいいのかも知
れない。

魔力がなくなつたら、僕には何も残らないけど、それでも・・・
いや・・・どうなんだろう・・・・。」

「うん・・・・・。」

「怪物がいなくなつたら、その時こそ完璧に地上から魔力は消える
かもしけない。」

それで調和が保たれる。」

「・・・・・・・・。」

「君はどう思つ?」

「・・・・・・・。」

「おー、・・・・・・・・?」

エリーゼの雲から小さいいびきが聞こえる。

バベルはため息をついて寝返りをつぎ、皿をつむる。

「どうまで流されてんだ。」

エリーゼは額にあたるものを感じて皿を覚ました。

バベルが木の実を投げつけていた。

「ファレ、ここど？」

雲から身を起すと、海の上だった。

「もう毎過ぎだよ。進行方向だから良かつたものの。行くぞ。」
ねぼけまなこで、寝ぐせを手で直しながら飛ぶ。

「この近くだ。」

波が陸をけずりとつていて。

バベルは真剣な顔であたりを飛ぶ。

エリーゼもあくびをしながら探す。

「あ、あ、あれ・・・・・・！」

エリーゼがバベルに指でおしえる。

湾をうめつくす程巨大な魚影が、どぐろを巻いて沈んでいるのが見えた。

「リヴァイアサンだ！」

バベルは岸に急降下する。

「こんな浅瀬に・・・。」

バベルが波打ち際に降り立つと、海がせり上がり、リヴァイアサンが姿を現した。

「待つっていたぞ、バベル。」

静かに耳に届くような声だ。

黒曜石のように黒く輝く巨体は、蛇のように長く、その影にバベルもエリーゼもすっぽりと飲み込まれてしまつ。

リヴァイアサンの魔力は、いるだけでエリーゼの身をビヨビヨと震わせた。

「お久しぶりです。リヴァイアサン。」

バベルも緊張しているようだ。

「あの怪物のことだらう?」

リヴィアイアサンは金色に鈍く光る皿を細めてバベルを見る。

「はい。」

リヴィアイアサンはバベルの言葉を待つ。

「私は戦つつもりです。できる限り。」

「そうか。」

リヴィアイアサンはゆっくりとうなずいた。

「あなたにも力をかしてほしいのです。」

バベルはリヴィアイアサンを黄緑色の瞳で見上げる。

リヴィアイアサンはエリーゼを見る。

エリーゼは固まっていた。

「あの怪物が再び現れるのも、またこの世界の行く末かもしけない。・

・・・。」

リヴィアイアサンの体から水がしたたり落ちている。

「しかし・・・、」

バベルはチラとエリーゼを見る。

「しかし、私達は何かができるかもしね。」

リヴィアイアサンは深い沈黙をつくる。

「そうか・・・。力を持った我々がいることも、世界の一つといふことか・・・。ならば、バベル力にならう。」

バベルが小さく頭を下げる。

「だが、あの怪物もまた、力を持ったとこことでは、我々、バベル、・・・。同じなのかもしれないな。」

「ええ・・・。そうですね・・・。」

バベルが目を伏せて応える。

リヴィアイアサンが海の中に帰つてゆく。

海から声が静かに響く。

「バベル、この世界がどうなるであれ、・・・・・・・私はお前の未来を祈つてるよ。」

バベルは深く感じ入つているようにも、沈んでるようにも見えた。

エリーゼは急に力が抜けて、ペタリと座りこんだ。

「これでいいだろ。・・・」

バベルが枝をもてあそびながら呟く。

「勝てそう？」

2人はリヴィアサンがいなくなつた渚に座つていた。

首をひねるバベル。

波がどびちる。

「戦う時は安全な所にいるんだよ。・・・・アサノハがいいか。あそこは大きな神殿もある。アンジェラも召喚しやすいし、アンジェラのそばにいるんだ。」

「バベルは？」

「どこでもいいよ。」

細い風がバベルの髪をゆらす。

「面白いところがある。行こう。」

バベルが連れて来たところは、広い花畠だった。花畠といつても、風に揺れて音をたてている花はみな、ドライフラワーだった。

地平線までドライフラワーが咲いている。

空はもう黄昏たそがれだった。

「珍しいだろ？ここのは枯れ落ちずにドライフラワーになるんだ。そして、雨季が来るとまた生きた花に戻るんだ。

その時来たら、すごいキレイだけど、・・・・僕には今が向いてる・・・・。」

バベルはふつと悲しそうな目になる。

「私もドライフラワー好き。ほら。」

エリーゼはカバンからドライフラワーのお守りを取り出して見せる。

「へー。」

バベルはそれを受けとり、花畠と重ねる。

「じゃあこれに魔法をかけてあげよう。願つたらこつでも、ここに来れるよつになるよ。」

バベルの手からデライフラーのお守りへ光が移る。

一 ありがとう

大切そうに受け取るエリーゼ。

「助けてくれてありがとう。……………」

「ん? 怪物のことかい? 違うよ、あれはー」

卷之二

エリー・ゼバベルの言葉を遮る。

- あひがとニ、

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

まるであなたは天使だね

バベルは下を向いて嘆ひ、

風がドライフラワーの花畠をなでて、バベルとエリー・ゼを吹き過ぎる。

後ろでガサツと音がして、振り向くと影が素早くヒリーゼをかすめる。

「キャッシュ。

エリー・ゼの腕から血が流れる。

血しぶきが口に入つて血の味がする。

バベルはとうさにエリーゼをひっぱつてかばう。

爪をむき出しにした大きな猫のような魔獣が、血走った目でうなづ

獸がまた襲いかかってくる。

「炎よ！」

バベルの声と同時に、魔獸がすさまじい炎に包まれる。

魔獸は灰も残さずに消えた。

「エリーゼ。大丈夫か。」

エリーゼの腕から血が流れ出している。

「大丈夫。たいしたことないわ。」

「だつて血が、・・・ああ。」

バベルはおひねりして、ヒリー ザの腕をおたぐる。

「月と僕の魔力が刺激したんだ。ごめん。治療魔法はできないんだ・

• 100

ハベルは今にも泣き出しそうな顔で謝る。

バベルは歴史をぐるし、物語をひきひきと語る。

「大丈夫。ホントに大丈夫よ。」

切り鳴は大きかつたが残り。

ニシカヒを同撫ひて、いづヒ物。

「アンジョンの塔」に行け。業が運んでくれよ。

۱۸۲

バベルの本が「まざめ」閃光。

白く細い羽が急に大きくなつて、

大きな鳥の姿になつてゐた。

ハベルの髪のように時折金色が光る。

一乘にて

エリーは乗る

鳥のひなのよに温かい

鳥になつたバヘ川か羽はたく

高く飛ひ上かへり、感じたりともなし速あで空が流れ、風を散らす、

ハラの答ひついた。

「アベニュの手元で死んでしまった。

バベルが棚を荒らして、包帯と薬草をエリーゼの腕に巻く。

「明日の夜にはアンジェラが帰つてくるだのうから、その時ちゃんと

と治してもらおう。」

「うん。私氣にしてないわ。こんなに平氣。バベルが悪いんじゃないわ。」

バベルは後ろを向いて少し首をふる。

「月の観測をしてくる。」

バベルは出していく。

エリー・ゼは一人座り、無数の鍵を見上げる。

ウトウトしていると、そばでドアの開く音がした。

見るとアンジエラが出てきたところだった。

ドアのすきまからどこかのジャングルが見える。

アンジエラは自分の数倍はある、長いバッグをひきずつていた。

「あれ、エリー・ゼじやないか。どうしてまだいるの？それは？」

アンジエラが不思議そうにエリー・ゼの包帯を見る。

エリー・ゼはとつとつとこれまでの話を聞かせる。

話し終え、考えこむアンジエラを見ていると、バベルが帰ってきた。

「アンジエラ、早かつたね。」

「あ、ああ。もう材料は全てそろえたよ。」

アンジエラはパンパンにふくれたバッグを、やつと肩から外す。

「エリー・ゼにケガをさせてしまって、治してくれ。」

「ん、ああ、分かった。」

アンジエラが棚から数種の薬草を取り出し、煎じ始める。

「月はあと4日後に破れる。」

バベルが言つと、アンジエラの動きが止まる。

「そんなに早いの！？急がないと。」

アンジエラが手を早める。

それから3日は大変だった。

アンジエラはいろいろな材料をコトコト煮たり配合したりの他に、アサノハに出かけて、大神殿へ打ち合わせに奔走していた。

エリーゼはアンジエラに囁かれて、アパローゼの町の隘を安全なアサノハに移動させた。

バベルは一人で精神を集中させるためにと置いて、ビルにいなくなってしまった。

そのため、エリーゼはバベルと話す機会があまりないままに、決戦の日の朝をむかえた。

月は地上からでも脈動が見えるほど、怪物が出てくるのが近いことを示している。

アンジエラの塔の前に、アンジエラとエリーゼとバベルが集まつた。

「久しぶり。」

エリーゼはバベルに囁く。

「ああ、そうだね。」

バベルはピンと張りつめた空気を放つて、魔力が研ぎ澄ませれた雰囲気だ。

「じゃあ、準備は万端だね。」

バベルの言葉にアンジエラとエリーゼがつなづく。

「アンジエラ、エリーゼをよろしく。僕は高台で怪物を狙つてるよ。」

「

「ああ。」

アンジエラがバベルをジックと見つめる。

「本当に・・・やるつもりなんだな?」

アンジエラが重く囁く。

「・・・ああ。」

バベルとアンジエラは田と田で話しかるようだ。

「じゃあ、行こう。」

アンジエラがエリーゼに囁く。

エリーゼはうなずく。

「ちょっと先に行つてて。」

アンジエラが短い首をすくめ、鍵をさしてドアの中に消える。ドアは薄く開いたまま。

「何だい？忘れ物でもした。」「

バベルが笑いかける。

「必ず無事で会いましょうね。また。」「

エリーゼが手を差し出す。

バベルは握手する。

「必ず。約束する。」「

「その時は私の町に来て。風薫る町って呼ばれてるのよ。」「

「ああ。行くよ。」「

「私、ホントにあなたが天使だと思つ。なにがあつても、私あなたが好きよ。」「

「・・・・・じゃあね。」「

手を離す。

エリーゼが手をふつてドアの中に消える。

バベルがドアを閉める。

「何話してたんだい？」「

アンジェラがニヤついて聞く。

「あつ！またカエルが来た！」「

アサノハの子供達が、アンジェラを木の棒で叩く。

「こら、痛い！ホントに痛い！やめろー！」「

アンジェラが子供達をけちらす。

それでも子供達はアンジェラに向かつてくる。

「怖がられるよりはマシか。・・・・」「

アンジェラとエリーゼは駆け足で大神殿に向かう。

大神殿の屋外の広場に、大勢の人達が集まっていた。

パテラもパテラの家族も、エリーゼの家族やアパロー・ゼの町の人達もいた。

アンジェラが台の上に立つて説明を始める。

「皆さん！これまで話してきたように、今夜月が破れ、怪物が出てきます！

しかし、ご心配には及びません！私が召喚する天使が、怪物の攻撃をひきつけ、かつ防いでくれます！遠方にいらっしゃる知人の方や、もちろん皆さんにも被害は及びません！

怪物は強力な魔法使いと、勇敢な仲間たちが必ず退治してくれます！皆さんは落ち着いて、パニックを起こさずにいていただければ、今まで以上の平穏な暮らしが約束できます！

観衆から拍手と喝采がわきあがる。

「ヨツ、カエル！頼むぞ！」

「カワイイ！」

子供達が台の上のアンジエラをひきずり下ろしもみくちゃにする。

エリーゼは青い空に白く脈打つ月を見上げる。

夜が来た。

人々はそれまでは酒を飲んだりして騒騒しかったが、徐々におとなしくなつていった。

赤子の泣き声があちこちで響く。

自然と人々は近しい人と手をつなぎ合つていた。

月の鼓動はしだいに速く大きくなつてくれる。

アンジエラが奥に合図する。

すると、大勢の巫女が手に手香炉を持って出て来て、大神殿の広場の周りをかこむ。

手香炉からは煙が細くたなびいている。

「何？」

エリーゼが、地面に複雑な紋様を描いているアンジエラにそつと聞く。

「特製の召喚用のお香さ。苦労したよ。

精神を安める薬も入つてる。」

アンジエラはこれまでにない真剣な面持ちだ。

手香炉から流れる煙が、霧のように広場を包んでいく。

アンジエラが呪文を唱え始めた。

紋様に光が巡り始める。

人々は目をつぶり祈っている。

月は今にもはちきれそうに大きく揺れる。

アンジエラが目を見開き、プリズムの光が映る。

紋様を巡る光が急回転する。

煙は大神殿を包み、なお濃くなつていく。

月がまた大きく動く。

アンジエラが聞き慣れない言葉を叫ぶ。

煙が渦を巻き、夜空に高く昇つてゆく。

しだいに煙が輪郭をつくり、それはおぼろげな巨大な天使の姿になつた。

見上げて涙する者もいた。

月の中から声がした。

激昂^{げつこう}のような悲鳴のようなつんざく声が。

月が破れた。

まさに卵のように真つ二つに割れた。

言葉を失い、息を止める人々。

破れた月の中から、白く輝く液体が細く流れ落ちる。

海に落ち、沈んでるようだつた。

最後の一滴が落ちて、沈黙が訪れる。

誰もこの世界にいなくなつたような沈黙。

海面に鋭い2本の白い角が突き出てきた。

それはゆつくりと、その次に白く輝く馬の頭が現れた。

その頭に目はない。

ただ白く輝くだけだ。

ひづめを海の上にのせて、全身を現す。

2本の細く長い角のついた白く輝く巨大な目の無い馬が、暗く動めく波と空の間に立つてている。

体は白い輝きのうねりが絶えず動いてからまりあつてている。

それは力の奔流そのものだつた。

怪物の足元から、みるみる流氷が広がる。

「化け物だ。」

誰かが呟く。

怪物が上を向いて吠えた。

咆哮は雲にこだまし、空は震え、海は怯え、大地はヒビわれて逃げ出そうとする。

怪物は天使の方に頭を向ける。

アンジェラは汗を滝のように流して天使を維持していくようだ。

怪物が厳かに口を開く。

中も白い。

口に虹色の光が溢れる。

それは重なり合い、真っ白になつて大きくなつていぐ。
人々は自分たちを向くそれを見て死を直感した。

怪物の口から白い光線が放たれる。

天使は両手をかざして身がまえる。

天使が光線を受けとめる。

すさまじいまばゆい光が爆発する。

辺りが真っ白に輝く。

やつと目が開けられるようになると、天使の輪郭はボヤけ、姿をなせていなかつた。

怪物がまた口を開いている。

アンジェラのゆがむ顔を細く汗がつたう。

怪物の口に虹の光が集まり出した時、海から怪物より少し小さいものが流氷を飛び散らせ、怪物の体に巻きついた。

リヴィアイアサンだった。

リヴィアイアサンの体が凍つてゆく。

怪物が身をよじる。

リヴィアイアサンが怪物の首にかみつく。

リヴィアイアサンの口に光が集まり、怪物の首で爆発する。

怪物が鳴き声をあげる。

リヴィア・イアサンは海に飛びこむ。

怪物の光線が後を追つて海に走る。

海面が白く光り、なくなる。

怪物の首から煙と火花が出ている。

上から赤と青の炎が怪物を襲う。

飛び交う赤と青のドラゴンが怪物に照らされる。
ずいぶん小さく見える。

怪物の体に炎が浴びせられる。

怪物の光線が赤いドラゴンの片羽をなくす。

青いドラゴンの片羽もなくされ、海に落ちる。

怪物がそれを狙つて光線を出す。

白く光り見えなくなる。

遠くで波しぶきがあがる。

リヴィア・イアサンの背に、赤と青のドラゴンがつかまっている。

遠くに見えなくなる。

その頃、山の頂に巨人のタイが立つっていた。
手には骨をつないだ巨大な槍を持っている。

大きく体をしならせ、槍を投げる。

空を引き裂いて、槍が怪物に飛ぶ。

うつろな天使に口を開く怪物に、突然槍が刺さる。

貫通して、怪物の体を串刺しにする。

大きく鳴く怪物。

怪物は槍の来た方向に光線を放つ。

それはタイの右腕をなくす。

雲の上でバベルが怪物を見ていた。

バベルは紫と金の服を着ている。

バベルが怪物を見すえ、両手をかざす。

バベルの胸の高さに薄い星空が広がる。

雲が回る。

星が回る。

バベルが口を開く。

「星よ、星よ、流れ星に別れを。

果てなる力と我をつなげ・・・・！」

バベルの胸を囲む星々と、頭の上に広がる星星が、呼応してまたたく。

バベルの空が消える。

上から星々の光が降つてくる。

バベルが咆哮する。

無数の白い星の光が、バベルの背後を抜けて怪物に飛ぶ。星は雷の尾をひいて、次々に怪物にぶつかる。

怪物が低く長く吠える。

星の光はぶつかり白い炎をあげる。

白い炎が怪物を包み、見えなくなる。

降る星が止み、白い炎が薄れしていく。

怪物は流水の上に肘をついて座つていた。

体はもうチラホラと小さい白い光が輝くだけだ。なおも天使に口を開く怪物。

アンジェラが力をふりしぶる。

天使は空を飛び、怪物の前にひざをつく。

天使は怪物の顔を手で包む。

次の瞬間、天使が白く輝く光になつて怪物と重なる。2人ともいなくなる。

流水が割れる。

人々は事態を分かつて歓声をあげる。

「やつたぞ！」

「終わったのね！」

皆、手と手をとり合つて喜び合つ。

エリーゼも一緒に喜んでいた。

楽団が一斉に明るい音楽を奏で始める。

アンジェラはあお向けに倒れて息を切らしている。

「やつたわ、アンジュラ！ スゴイわ！」

エリー・ゼがアンジエラに抱きつくる。

「助かったのね！あの魔法スゴイ！バベルでしょ！ねえ！」

アンジエラは手で田をかくして死んだように黙つてゐる。

「アンジウラ?」

エリーせがアンジウラの手をどける

アンジムに迷宮して泣いていた

雲の上にバベル。

下に見えるアサノハから歓声が「」まで聞こえる。

エリーゼ、助かつてよかつた。

バベルは一人言を言う。

たる。それだけでも、この世界は荒廃していく。……………

僕が壊すんだ
我々にしてこの夜空は溶かそう
……………
僕しか

「バベルは黙る。」

「吾の町に行く約束は誰かこねずぬハ・・・。」

春の暖日 徒然に語るに
風薰る町か、きっと・・・。

バベルは言葉を切つて、舟に向かつて飛び立つ。

「この時もまた、伝説になつて忘れられるかもしねえ。

言葉が一粒の雪になつて、ヒラヒラと風にのつて落ちて消えた。

「そんな・・・。」

エリーゼはアンジュラから話を聞き出した。

アンジュラはむせび泣いてる。

「それじゃあ、バベルは・・・・?」

卷之六

アンジエラの顔を涙がとめどなくつたう。

「魔力はもうほとんど……。…………。バベルが……。

死んじゃう。……。」

アンジエラは顔を手でおおう。

人々の歓声はますます大きく、鳴り止まない。

エリーゼがアンジエラの腕をつかんで、広場のはじに連れていぐ。

「私を飛ばして！」

「え？」

「速く、私を速く飛ばせるでしょ！？」

「そりや、何をするんだ！？」

「天使をつかまえに行くのよ！」

「けど、僕は弓矢みたいに打ち出すしかできない。君の力ではコントロールできないから、月にぶつかってしまつよ！」

「あそこには飛ばせて！」

エリーゼは迷わず月の近くの空を指さす。

「早く！」

アンジエラはエリーゼの足下に急いで紋様を描く。

「できた！」

紋様に光が巡る。

「頼む！」

アンジエラが叫ぶ。

紋様が光を放つ。

エリーゼが勢いよく飛び出した。

エリーゼの羽が白く光る。

「バベルー！」

こぼれそうな星空に飛びこむ。

割れた月がどんどん近くなる。

月と星の間に点が見える。

「バベル！」

バベルは驚いた顔でエリーゼを見る。

バベルにぶつかってエリーゼは止まつた。

「エリーゼ！！」

エリーゼはバベルにつめる。

「どうして！？どうしてなの！？」

「どうしてって、・・・・・・・・僕がやるほかないんだ。」

「でも、・・・・・・・・。」

エリーゼが必死にバベルを見つめる。

「僕は死なないよ。僕の魔力は不滅だから。」

バベルが笑う。

「また少し眠るだけだ。今度はいい夢見るよ。多分ね。」

エリーゼは首をふる。

「じゃあ私が町につれてくれ。すぐに起こしてあげる。だから、最後までついていて、・・・・・・・・そばにいる。」

月のかけらに向かう2人。

月のかけらは青白く光つている。

「ここに入つてたんだ。きゅうくつだつただろうつな。」

破れた口を触つてバベルが言つ。

エリーゼとバベルを怪物の魔力が届かない膜が包む。

目の前に雲海が広がつてゐる。

下を流氷が覆つてゐる。

月の光を受けて、水色の宝石のようだ。

「キレイね。」

エリーゼが笑つて言つ。

「うん。こんな景色を前に見たことがあるよ。」

「どこで。」

「どこだつたかな。ずっとずっと雪と氷が続いてるんだ。誰もいない。ずっと昔に行つたんだ。」

「ふーん。私も行つてみたい。」

いつのまにかバベルとエリーゼを、別々の膜が包んでいた。エリーゼはバベルを見る。

「エリーゼ、僕も君が好きだ。君こそ天使だと思つよ。皆の力をつなぐきっかけになつたんだから。ありがとう。さよなら・・・・。」

ドンドンと膜を叩くエリーゼ。

エリーゼはアサノハの方へ降りていく。

「バベル。」

エリーゼが泣く。

見えなくなつた。

月のかけらをなでるバベル。

「怪物よ。これで終わりだ。僕も行くよ。」

バベルの体が白く光る。

「エリーゼ!」

港にありたエリーゼにアンジエラが駆けよる。

エリーゼは泣きじゃくる。

割れた月が青く光を放ち、散り散りの星になつて、夜空に消え入る。

神殿からはひときわ大きな歓声があがる。

エリーゼは泣き声をあげて泣いた。

遠い遠い海に白い三日月が浮いていた。

その上にはバベルがうつ向けにグツタリとよりかかつていた。

三日月が流木にぶつかり、バベルが転がつて流木に移る。

三日月は粉々に崩れ、無数の銀の小魚になつて海の中に散つた。

あとには、波がバベルを運ぶ音だけ。

1月後、アパローゼの町の家の2階にエリーゼがいた。

ベッドの枕元にはアンジエラオルゴール。

アンジエラは今やアサノハのマスコットになつていた。

エリーゼはボンヤリその音を聴いている。

ハツと思いついて、ベッドの下からカバンをひっぱり出す。

カバンの中をのぞいて、ドライフラワーのお守りを取り出す。

エリーゼはドライフラワーの花畠に立っていた。

風に揺れて、乾いた音を立てている。

「雨よ！」

声がした。

エリーゼはキヨロキヨロする。

雨雲がわきあこり、雨がふり出した。

ドライフラワーがみるみる鮮やかな色をとり戻し、水をはじく。

雨があがる。

花の香りが溢れる。

いつかバベルが入れてくれた温室の香りだ。

「水の魔法は得意なんだ。」

声の方をエリーゼは見る。

花の間からアンジェラが顔を出す。
ため息をつくエリーゼ。

「おいおい、ひどいなー。久しぶりなのに。」

「声で分かつたけど・・・。」

満開の花の中をアンジェラがかきわけてくる。
「バベルの魔法だね。」

「うん。」

ドライフラワーのお守りを見せる。

しばらく2人で座つて、アンジェラの出したアップルティーを飲み
つつ、花畠を眺める。

「バベルの言つてたとこ、どこなのかな。」

「うん？」

エリーゼは、月のかけらでバベルの話していた雪と氷の場所の話を
した。

「どこかなあ、・・・・・・。それはもしかしたらルタインクかも
しない。聞いたことがある。最果ての地にそんなところがあるって。

「行つてみたいなー。」

「そう? がんばれば行けると思つよ。」

「え? どうやって?」

「情報を集めるのに時間はかかるけど、鍵を作つたら行けるよ。で
きたら送つてあげる。」

1月後。

エリーゼの部屋の窓に、黒猫が柔らかな毛をすりつけている。
エリーゼが窓を開けると封筒に変わった。

中には新しい鍵が入つていた。

エリーゼはワクワクして鍵を虚空中にしごむ。
ドアが現れた。

開くと極寒の風が吹きつけてくる。

急いでコートと帽子と手袋を2重につけて、入つてゆく。
バベルの言つた通り、雪と氷がどこまでも続いている。

「ヒョー、サムー。」

凍る森を思い出すわ。

エリーゼの体を水色の光が包んで、エリーゼが飛び立つ。
この頃、なんだか魔力が強くなつてゐみたい。

ふきすさぶ風をさけて高く昇る。

目の端に、金色の光が映る。

「あ!」

それはまぎれもなくバベルが眠つていた箱だった。
意識を集中すると、弱弱しいがバベルの波調を感じる。

夢を見ていた。

少しだけ夢を。

バベルは箱の中で目を開く。

外でドンドン叩く音がしたからだ。

「バベル！」

エリー・ゼの声がする。

手のひらをフタに押しつけた。

出たら何て言おうか。

まず静かにするよつて、指をエリー・ゼの頭にあてよつて。

フタをゆっくりと押し開く。

エリー・ゼが目を輝かせて待つている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1348i/>

BABELL!!

2010年10月21日20時11分発行